円頓戒の根本問題

恵 谷 隆 戒

うなことであります。 司会の方からお話がありましたように、 昨年、 お邪魔するという予定になっていたのですが、 今回になったよ

対する御理解が少いのではないかとも存じます。 けれども、浄土真宗の方では円頓戒は、直接の関係はないわけでありまして、或いは、 お話し申上げる題は、ここに掲げてありますように 「円頓戒の根本問題」という、妙な題を出 皆様方の中には したわけであります "円頓戒"に

すことのできない問題であるということが言えるのではないかと思うわけであります。 法といえども円頓戒とやはり関連性があるのであります。 けであります。 んど大なり小なり円頓戒と関係があるわけです。真言宗へまいりますと密教の戒法というものがありますが の大戒として伝承されている、といったように、拾いあげてみますと、日本では、浄土真宗を除く以外の宗派は、殆 りのこと、日蓮宗、曹洞宗・臨済宗等の禅宗、それから融通念佛宗、 しかし、考えて見れば、 円頓戒が禅宗の方へ伝えられては、禅戒として今日伝承されており、 日本佛教全体の上からいうと、円頓戒は一つの大きな問題でありまして、天台宗はもとよ かように見てまいりますと、 浄土宗、その他いろんな宗派に関係しているわ 日蓮宗の方へ伝わっては、 円頓戒は、 日本佛教と切り離 この戒 本門

から おりますので、それらの一々について本日この時間に、お話しを申上げることはできないと思いますので、二、三 円頓戒と一口 そうした意味から「根本問題」という題を出したわけであります。 に申 しますけれども、 色 一々問 「題がありますが、その中で根本の問題というものは如何 「根本問題」と申しましても、 なるものであろ

教大師の偽作の著作、例えば学生式問答という八巻の著述がありますが、この書物とか、一心金剛戒体秘訣という上下 とになります。 るのであります。 円頓戒という名称は出 でありまして、この中にも円頓戒という名称は用いてないのであります。この外天台や荊溪湛然などの著述の中にも 台の菩薩戒疏、 に荊渓湛然 # って日本へ伝えられているというわけなのですが、天台大師は円頓戒という名称は用いてないのです。天台の第六代 0 一巻の著述などに、 1紀に出られた天台智者大師智顗によって創始され、それが伝々相伝えられて、天台宗の戒法として、 問 円頓戒という名前が付いたのは比較的新しいのです。 そこでまず第一に 伝教大師 !題を取り上げてお話しを申上げようと思っております。 の真撰の著述の中には、 普 普通 即ち梵網経を註釈した書物でありまして、それを更に註釈したものが明曠 通には妙楽大師と呼んでおりますが、その妙楽大師、 従って中国においては、円頓戒の名称が用いられてなくて、 円頓戒という名称が現れてくるのであります。 には円 「円頓戒」という名称はどうなのかということから出発していこうかと思うのであります。 「ていないのでありまして、円融菩薩戒、 頓 一戒というものは、 円頓戒という名称は出て来ないのです。 伝教大師からそのように呼ぶようになったといわれておりますけれ 円頓戒というものは、 佛性戒、 それから以後円頓戒という名称が 荊渓湛然の門人に明曠という人があります。 円教頓制戒、 円頓戒という名称が出て来るのは、 日本において用いられた名称というこ 御承知のように、 菩薩戒等の名称が の删補疏(さんぽしょ)二巻 中国の隋の時代、六 般 用 伝 教大師 天

まず平安朝中期以降になっ

広く用いられるようになったものと思われます。

そういうわけで、円頓戒という名称は、

たのでありますが、 どは、この戒法を如何ように呼んでいたかと申しますと、人によってそれぞれ名称が異なっておりまして、 う名称は、 いう名称が、 まして、学生式問答の如きは、平安中期以降にならないとその名が出てこないのであります。 て用いられるようになったものと考えてよいかと思います。 定していないのであります。例えて言えば、菩薩戒とか、或いは円戒とか、円教頓制の戒とか、金剛宝戒とか、一 佛性戒とか名づけられておりまして、呼称は必ずしも一様でないというのが実際であります。それが今申 今申し上げましたように、後世名づけられたものでありますが、それならば、天台・荊渓・明曠 広く一 般に用いられるようになるのは、平安末期以降であるといってよいでありましょう。円頓戒とい 江戸時代の天台学者によって偽作説が主張され、それ以後偽作として取扱われているわけであ 学生式問答は、古来より真撰の著述として取 従いまして、 円 必ずしも 伝教な .頓戒と

法だというふうにお考えのようでありますけれども、これはそうでないのであります。 . うものはどういう経典をよりどころとしておるかという問題が一つの課題になろうかと思うのであります。 「称の問 の依経傍正の問題でありますが、何を正依とし、 何を傍依とするか、一 般の学者の方々は、 円頓戒というものは、 円頓戒: は梵網 経 0) 戒

るでありましょう。 見ると、 けであるから、 頓の戒なのでありますから、法華経をよりどころとすることは当然であります。 すように、学生式問答が世に行われてくるようになってから、円頓戒という名称が一定して来たのであります。 かし天台宗の始祖である天台智顗が梵網経の註釈書 天台の戒法についての見方は法華経中心になっておりますから、 .題につきましては、大体そのぐらいにしておきまして、次の問題は依経傍正と申しましょうか、 **梵網経を正依とすべきであるという説も成り立つわけでありますが、しかし、天台大師** 次に本業瓔珞経というお経を御存知でしょうが、 (本書の真偽については多少の疑問があるが) 円頓戒においてはこの経をよりどころとしてい 法華経中心の戒法であるということが出来 を著わ 0) 他 円頓 の著 したわ 述を

扱わ

れてい

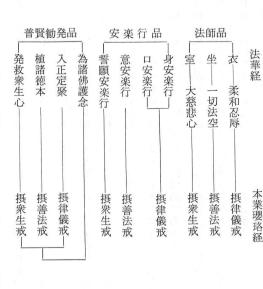
として取 るのであります。 の戒法が円頓戒の中に相当浸透していると思っているのでありますけれども、 わ n てい 従いまして円頓戒の所依の経典は、 ないのです。 これが問題になろうかと思うのであります。 法華経、 梵網経、 本業瓔珞経ということになります。 この経典は古来より所 私は菩 依

方等経 と記 ものであろうかと思うのであります。 梵網の十重四十八軽戒、 正依法華一乗戒、 この依経傍正の問題を明確にしたのは、 してあって、 大涅槃等」と記してあって傍依の経典を、 正依の経典を明示しているのであります。 三如来室衣坐戒、身口意誓願、 瓔珞の十波羅夷の律儀戒、 先程申しました学生式問答でありまして、学生式問答を見ますというと、 はっきりと示しておるのです。 慈悲喜捨の摂衆生戒、八万四千の法門摂善法戒、 四安楽行戒、 次に傍依としては、学生式問答によりますと、 普賢四種戒、 次に普賢観経の三師 これが正依傍依を明示した最初の 諸証同学に依る」 文殊問般若経 「傍らに、

0 本 衣、 ら法華経 ばならぬということを説いたものが法師品であります。ここに戒の真精神というものを見出しておるのです。 かというと、いま学生式問答にある文を申上げましたように、 来より天台正統派の説とされているのであります。 D 種 神であるというところから、 戒 師 室の三軌の戒法です。 品 が説いてあるのでありまして、 の安楽行品には、 学生式問答の立場からしますと、 の三軌戒、 安楽行品 身口 法師たるものは如来の衣を着て、 の四安楽行戒 意誓願の四安楽行というものが説いてありますが、その四安楽行というものが 四安楽行戒によるのであります。 為諸佛護念、 正依法華、 普賢勧発品 しからば、 入正定聚、 傍依梵網とこういうことになるのでありまして、 の普賢の四種戒を、 法師品の中に三軌戒というものが説いてある。 法華経のどこに根拠を置いて円頓戒の戒法を立てるの 植諸徳本、 如来の坐に坐し、 次に法華経の最後の品である普賢勧発品 発救衆生心がそれであります。 本業瓔珞経に説く三聚浄戒に配当し、 如来の部屋に入って生活 この説 前 しなけれ それ それ 述の 戒 普賢 は古 如 根 は

法華の戒法は三聚浄戒に統摂されるとするのであります。

今参考のために、 両経の戒法を図示すれば次の如くであります。



の結 同学に依って授戒することを規定したのは、 るから、 右図に示すように、 円頓戒はまさしく法華経の戒法によるものとなし、 経である普賢観 普賢観 日本の天台宗の授戒の仕方は、 経を正依の経典とするというのが学生式問答の説であります。 経に説 法華経 に説 不現前の五師を請じて授戒することが説いてあり、 かれている戒法は、三聚浄戒におさまるものとするのが学生式問答の説でありまし 貫して普賢観経の説に依って行なっているのであります。ですから学生式 天台宗の第六祖、 正依法華の説が成立することになるのであります。また法 荊渓湛然の受菩薩戒儀から端を発するもので、 円頓戒の授戒が、普賢観経の三師 円頓戒は、この経によって授戒す それ以 諸

証

後中

国

問答に正依法華説が立てられている所以でありまして、天台宗の正統派においては、 正依法華説を立てるのを特色と

するものであります。

梵網 H 0 には、 りまして、次第に法華中心の戒法が強調されてくるようになり、 とも考えられますが、その点は明瞭でありません。ともかく、 て梵網の戒法を理解 らく天台第六祖荊渓湛然の門人だと考えられ るのでありまして、 まして、具体的にい 事 たものと思われるのでありまして、 れ まして、 満や道邃について天台の教義や戒法を学んだのでありますから、 ば 情 の思想 依法華ということが、文献の上に明確に打ち出された最初のものは、 そうした説は明確でありません。 ならぬ か 想像されるのであります。 が形 伝教の戒についての思想は、 明曠の著した删補疏におきましては、 理由 成されて来たものと考えられるのであります。 が明 えば、 伝教の著述の中に明曠の説が引用されていることによっても知られるのであります。 してい 確になって来るものと思われます。 天台大師の著作である菩薩戒義疏においては、 るのであります。 か 円頓戒とは法華円頓の戒という意味であることから考えてみましても、 かる立場から考察してみましても、 ただ思想の移り変るに従って、 梵網の戒法よりも、 伝教大師 るのでありますが、 法華経 は の戒法に重点がおかれて説かれており、 明曠の戒疏の思想的影響を多分に受けているも 何 かようにして円頓戒という名称が用 伝教が明曠の思想的影響を受けていることは れかといえば法華の戒法に重点がお ついに学生式問答に見られるが如き、 伝教大師が入唐したときに、 このときおそらく明曠にも面会したのではない 法華の戒法が次第に強調されてくるのであ 円頓戒は、 学生式問答でありまして、それ以 **梵網経の戒法に重点がおかれてい** 正依法華説に立脚するものでな 荊渓湛然 法華の立場に立 いられるように かれているのであ 正依法華傍依 0 明 門人である のと思われ 前 曠はおそ るのであ の文献

0) 問 円 題 戒 は必ずしも一様でないのであります。 の流派は、 伝教大師以後、 多くの分流を生じて来ているのでありまして、それらの流派によって、 即ち伝教・慈覚・慧亮・常済・理仙 ・慈慧と継承され、 慈慧 の門下より 依

経傍正

恵心 を正 の系統などは、 源空と継承される系統も正依法華傍依梵網を正義とするのであります。 依 戒 とするのでありますから、 軽戒の全分を実行しなければならぬ必要はないわけであります。 あります。そこで梵網経に説く、 ところが前述しましたように、 わ しているのでありますが、 ことで、必ずこれを実行しなければならないわけですが、四十八軽戒は、 派と同 の外にも正依梵網説を主張する流派もありますが、 なければならぬ道徳的行為の規範でありますが、 経を傍依の経典とすることになるわけです。 の経典としたか、 n ですから円頓戒の所依の経典ということになると、 薬忍・湛敷・湛智・宗快と伝承される大原流や、良忍・厳賢・明応・観西・尊永・良鎮と伝承される大念佛寺 一義とするのであります。 ます。 と檀那流とに分れて伝戒される系統が、 内容のものであり、 + 波羅夷 正依梵網傍依法華を正義とするのでありまして、依経傍正は流派によって必ずしも一様でありません。 その理 の思想は、 この経典には三 **梵網経を傍依の経典とするのであります。次に学生式問答には、** 由 また慈覚大師正流と呼ばれている慈覚・長意・慈念・慈忍・源心・禅仁・良忍 三聚浄戒は、 は明白でありませんけれども、 法華経には戒法の精神のみ説いてあって、 優婆塞戒経 十重禁戒と四十八軽戒とを道徳的行為の規範として依用するわけでありまして、 一切の道徳律を三つに統摂したものでありますが、 一聚浄戒と十波羅夷罪とが説いてあるわけで、 の六重法と菩薩地持経 梵網の戒法は、 天台宗の伝戒でありますが、 その中で十重禁戒は、 天台宗や浄土宗の戒系では正依法華説を正義とするのでありま 法華経を第一に挙げ、正依の経典としなければなりません。 恐らく梵網経と同一 真俗一 とも角、 0) **梵網経と同一内容のものであるからでありましょ** 四重法とを併 貫の戒法でありまして、 ところが慈覚大師 これを犯せば菩薩の波羅夷罪になるという 日常生活の行為の規範が示されてないので 出家も在家も一様にこの戒法を行為の規範 たもてるだけたもつという戒法で、四十八 種類の経典であるからであろうと思 せたものでありますけれども、 十波羅夷は、 正流から分派した流派 本業瓔珞経を傍依経 出家も在家も共に実践 何故に本業瓔珞 梵網 経 • 叡 重 梵

らの

経典を傍依とせずに、

本業瓔珞経を傍依としたということは、

即

この流派においては、正依法華傍依梵網

すが、 は う。 三聚浄戒 前 とも角天台教学においては瓔珞経は重要視されているわけですから、 述 0 理 由 は瑜伽師 の外 に 地論 天台の三諦思想の根拠がこの や勝 鬘経を初め多くの経典に説 経 典に依っていることも関連性をもっているものと考えら かれているわけですが、 そうした関係からして、 特に本業瓔珞経をとりあげ 本経を傍依の た所以

典としてとりあげたものと考えられ

ます。

いえば、 論 あ の三経を傍依の経典としているわけですが、 究されているわけですが、 ります。 次に学生式問答におきましては、 正依傍依 その中で正 の問題についての議論 依傍依を論ずる場合には、 依経傍正の問題は、 梵網、 は、 瓔珞の両経を傍依の経典とするの外に、 古来より種 普通には、 以上のようなことで終っておきたいと思います。 前述の 法華経、 如き正依法華傍依梵網、 々論じられて来ているものでありますけれども、 梵網経、 本業瓔珞経 正依梵網傍依法華など種 文殊問般若、 の三 経を所依の経 方等陀羅尼、 尚厳密な立 典とす 今は省略 × 0) 大涅 場か 問 3 題 5 か

たします。

台大師 無作の仮色を戒体とするとしているのでありまして、 佛教におきましても亦この三つの問題があるわけです。 承 るわけでありますが、 知の通りであります。 次に戒体 0) 乗佛教や大乗佛教の戒体説は省略 思想から述べますと、 の問題について一言申述べておきたいのであります。 小乗佛教におきましては、戒体について心法・色法・不相応法の三つの戒体説があり、 小乗佛教でも、 無作戒は実相心をもって体とすると主張しており、 摩訶止観や次第禅門におきましては、 いたしまして、 大乗佛教でも、 両者の説が相違しているわけであります。 円頓戒の戒体説について述べてみたい 今円頓戒におきましてもこの三つの問 戒体の問題は、 この問題は戒の根本問題の一つでありますことは御 心法戒体の義が説かれており、 戒の根本問題として古来より重要視され 五大院安然の如きは、 と思います。 題 また明 があるわけです。 真如 菩薩戒 曠 佛性 0 初 をも 8 は性 に天 7

作戒

は色心を体とするも、

て戒体とすると主張し、その後の諸流派においても戒体説は、必ずしも一様でありませんが、 であります。 両 法戒体説を正義とする所以は、 どで心法戒体を力説する所以は、摩訶止観に根拠をおき、乗戒一致を主張するからでありまして、慈覚大師 ら諸説の中でも、 に端を発しているとすれば、起さずんば止んなん、 .流におきましては、多くは心法戒体の義を立てており、慈覚大師正流におきましては、性無作仮色を戒体とする しかし厳密な意味からすれば、これらといえども人によって戒体説は必ずしも一様でありません。 心法戒体説と色法戒体説とが、古来より論争の中心問題となっているのであります。 天台戒疏に依り作法受得を強調するからであります。 起さば性なる無作の仮色を戒体とするという義に立脚して、 しかし円頓戒の思想が天台戒疏 しかし天台宗の恵 特に恵心流 IE. 流 それ · 檀 色

説を主

一張するのが正義でなければなりません。

らば、 以 体をいうのではありません。天台の教理が色心不二の原則に立脚しているわけですから、色心一如の色法の であり、 ということが肝要でありまして、授戒をするには白四羯磨の作法をするわけであります。 をすることによって、 簡単にお話し申し上げたいと存じます。起さずんば止んなんというのは、 て戒体が発動してくるわけで、その戒体は性なる無作の仮色であるというわけですが、 、後最後臨終の夕まで戒法を実践しましょうという、固い決意をする作法をいうのであります。決意をすることによ る本来的な力が戒体であるという義でありまして、そうした道徳行為を引き起してくる本来的な力を、 次に天台戒疏に記す、 戒体 無作とは離作業の義、仮色とは因縁仮和合の色という義でありまして、ここでいう色というのは、 をわ (道徳行為を発動する根本的な力) は発動しないという意味であり、起さば性なる無作の仮色とは、 かりやすい言葉をもって言い表しますと、 動機、決意がなされ、そこに動作・結果がもたらされてくるわけでありますから、 起さずんば止んなん、起さば性なる無作の仮色とは如何なる意味であろうか。これについて 我々人間が生れつき持っている、 戒法を実行しようと決意を起さなか 性というのは性徳本 白四羯磨の作法とは、 この身体の中に潜在して 誰れでも生 授戒をする 義であり 単なる肉 ったな の義

う。 れつきのままこの身体に持っているのであって、それが持戒行為を発動させてくるのであるという意味になりましょ 起さずんば止んなん、 意をすることによって、行為が開始され、人格形成という結果がもたらされてくるわけでありますから、 発得の戒とは、授戒することによって、本来持っているところの佛性が活動を開始して、やがて人格を形成してくる のことをいうのであり、 つに分けて説明しているのであります。 した普通授菩薩戒広釈には、授戒することによって戒体が活動してくる順序を、性徳の戒、 来ないわけでありますから、 ことをいうのであります。かように道徳的行為を引き起してくる本来的な力は持っていても、そこに動機を与え、 言申し述べましたように、 しかし、たとえ本来的にそうした根本的な力(戒体)を持っていたにしても、決意をしなければ活動を開始して 起さば性なる無作の仮色を戒体とするという説が立てられたものと考えられます。 伝授の戒というのは、釈尊以来、伝々相伝えて来た戒を受者に授けることをいうのであり、 円頓戒におきましては、 白四羯磨の作法の必要性があるわけです。そこで円頓戒思想を大成した五大院安然の著 性徳の戒というのは、我々人間が生れつき持っているこの身体、 種々の戒体説があるわけですが、天台戒疏の説をもって正義と 伝授の戒、 発得の戒の三 天台戒疏 勿論前にも 即ち佛性戒

学び、 修行をすること以外に戒法をたもつ必要なしとするのであります。こうした思想が後世に影響しては、 0) 、佛教に大なる影響を及していることは御承知の通りであります。 そうした恵心流や檀那流の教学においては、 以上三つの問題について概要のみを申し上げたわけでありますが、なおこの外に種々の問題があるわけでありまし 致の戒法を説くところに特色を持つものであります。 例えば、 実践することと、 中古天台の恵 戒法をたもつこととは一致であるという意でありまして、 ・檀両流の教学の如きは、 日本佛教思想史上におきまして、 乗戒一致ということは、 三諦円融、 三諦円融の理を悟り、 洵に重大な問題であり、 一心三観の天台の教義 浄土宗西山派 ì 三観

するのが伝統的立場であります。

浄戒としており、 頂 併 を認めないことになるのは理の当然であり、 うした乗戒一致と作法受得とは、 でありまして、 要性を強調するわけであります。 得道することが出来るという意味であります。 ころに特色を持つものであります。 の念戒一致思想となり、 の立場からすれば、 立 がけばよいかと存じます。 を主張することになるわけであります。このことは大諮請という資料の中に詳述してありますから、 平安末期頃の文献資料によりますと、そうした傾向が濃厚であることは御承知のことと存じます。こ そうした乗戒一致の思想に対して、 善慧房証空の如きは戒念一致を主張しているわけでありますから、 三諦・三観そのままが三聚浄戒であるとするのであるから、 天台真盛宗の戒称一致の思想となり、日蓮宗の本門の妙戒となって展開したものと考えられ 事戒、 これに反して恵・檀両流の系統においては、 即ち作法受得を主張する法然上人門流の中でも、 言葉を換えていえば、 作法受得ということは、 事戒の立場からすれば、教観相承の外に、 従ってこの流派の系統を踏襲する浄土宗や禅宗においては、 慈覚大師正流の戒系においては、 理戒と事戒との二つの立場を示したものでありまして、 作法、 即ち授戒することによって、戒体を発得し、 授戒を軽視する傾向が生じてくるわけ 天台の教観以外に、 長楽寺隆寛の如きは、 恵心流教学の影響が濃厚である 作法受得の戒法を主張すると 別に戒脈の相伝を立て、 別に授戒の必要 三心即三 それを御覧 授戒の必 理戒 成

鳴りをひそめるという状態であって、 されている彼の戒に対する見解は、 安然でありまして、 · 東両 以上円頓 真言宗教時問答や普通授菩薩戒広釈の如きは、 密の論争がたけなわであったわけですが、彼が多数の著述を出して東密の説を批判したために、東密の学者も 戒の問題点について、 彼は僧正遍照の門人で、慈覚大師円仁についても学んだ人で、 種々の問題を提起したわけでありますが、 現代の進歩した倫理学説と比較しても、決して劣らない学説を、 日本佛教思想史上特筆大書すべき思想家であると思っております。 特にすぐれた著作であると思いますが、 円頓 一戒の思想を大成した人は、 博識広覧の大思想家であり、 普通授菩薩戒広釈 平安朝の初期 彼 の著作の 五大院 を

ことを痛感するのであります。

す。 もので、 少し下った時代において主張しているということは、洵に驚くべきことであると思うのであります。 以上は必ず実行しなければならぬものであるという意味でありまして、伝教大師以後、この問題が円頓戒の重要問 破戒の行為をしたにしても、道徳的行為を引き起してくる根本的な力は、永久に失われないという意味であり、真俗 や標準を明確にすると共に、道徳的行為の内容を明かにしており、 として取扱われているのであります。 貫ということは、 得永不失ということは、一度び戒体を発得したならば、たとえその中間において種々の環境に遭遇して、一時的に 最後に円頓戒におきましては、一得永不失、真俗一貫の戒法ということをやかましく主張するのでありますが、 従って円頓戒を研究する場合には、安然の思想は特に御注意なさることが肝要ではなかろうかと思うのでありま 後世の日本佛教に偉大な影響を及しているものでありまして、円頓戒の思想は、彼の思想が発達の頂点に位する それ以後はその思想を踏襲するのみにとどまっており、特別の思想的発達は見ることが出来ないのでありま 法華・梵網の戒法は、普遍妥当的な道徳であって、 殊に知恩報恩を以て道徳の標準としたということ 在家たると出家たるとを問 わず、人間である 彼は道徳の理

これを以てこの度の講演の責めを果させて頂いたことに致します。御清聴を感謝いたします。 上来まことにまとまりのつかない問題を取りあげて、思いつきのままを申し述べて申しわけない次第でありますが、

(本稿は昭和四十六年十一月九日、大谷大学佛教学会における特別講演の筆録を先生に加筆していただいたものである。)